

KUBELIK
Conducted
Má vlast
1991 Japan

スメタナ
Bedřich Smetana (1824 - 84)
連作交響詩《わが祖国》

Má vlast

- | | | |
|---|-------------------------|---------|
| 1 | I. 交響詩《ヴィシェブラド (高い城)》 | |
| | "Vyšehrad" | 15' 37" |
| 2 | II. 交響詩《モルダウ》 | |
| | "Vltava" | 11' 52" |
| 3 | III. 交響詩《シャルカ》 | |
| | "Šárka" | 9' 50" |
| 4 | IV. 交響詩《ボヘミアの森と草原から》 | |
| | "Z českých luhů a hájů" | 13' 26" |
| 5 | V. 交響詩《ターボル》 | |
| | "Tábor" | 13' 14" |
| 6 | VI. 交響詩《ブラニーク》 | |
| | "Blaník" | 15' 01" |

指揮：ラファエル・クーベリック
Conductor: Rafael Kubelik
チェコ・フィルハーモニー管弦楽団
Czech Philharmonic Orchestra

収録：1991年11月2日 サントリーホール
Recording: 2nd November 1991
Suntory Hall, Tokyo

巨匠クーベリックとの出会い
木之下晃

1989年12月、チェコの“ビロード革命”の最中、私はプラハにいた。

12月26日、小雪が舞うレトナ広場に80万人の人々が集まっていた。私はこのように多くの人が一堂に集まった光景をはじめてみた。そこに集まった人たちの多くはブルーのダウンジャケットを着ていて、まるで青い海原を見る思いがした。当時のチェコの一般の人たちの多くは貧しく、安物の青色ダウンジャケットをまとっていた。そして手に白と赤、青の三色国旗を掲げて、足元から深々と冷える寒さに、自然に跳びはね、それが人波となって、まるで海岸に打ち寄せる波の如くにうねっていた。

その集会には時の首相のアデメツツヤ、亡命した超人氣ロック歌手のフトカまでが同じ演台に立った。その時に首相へ送られた市民の冷たい視線は、彼の背筋を鋭く射抜き、ソ連に支配された共産党政権の存在を完全に否定していた。

翌27日の正午。プラハの街中の教会の鐘が鳴り、サイレンがうなり、市民はゼネストに突入。市の中心にあるヴァーツラフ広場は50万人の市民で埋め尽くされた。この広場は、1968年8月20日、ソ連が戦車を導入してチェコを占領した『プラハの春』事件が起きた所である。その同じ広場で、チェコの人々は真の民主主義を無血で勝ち取ったのである。チェコの歴史は常に強大な隣国による蹂躪の歴史であった。

“ビロード革命”の翌年の1990年6月、『プラハの春』音楽祭にはラファエル・クーベリックやピアニストのルドルフ・フィルクスニーなど、チェコから亡命した音楽家たちが次々と里帰りしてきた。フィルクスニーは第2次大戦中に、ナチスがチェコに進攻して来た時、バリに脱出。レジスタンス運動を行って、戦後はアメリカに亡命していた。クーベリックは48年に共産党政権が生まれると英国に亡命。スイスの国籍を取得して欧米で活躍していた。またこの音楽祭にはレナード・バーンスタインも出演した。彼は28歳の時に、第2回『プラハの春』で、ヨーロッパ・デビューをしていて、43年ぶりに平和の使者として歓呼の礼で迎えられていた。

この音楽祭の時、私は新装となったプラハのバレスホテルに投宿して取材をしていた。

或る日、ホテルのレストランの隅で、夫妻睦まじく静かに食事をとっているクーベリックと行き逢った。実は75年に巨匠が来日された折、帝国ホテルで1時間ほどインタビューをしたことがあったので、懐かしさのあまり、不躰に食事をされている席に行って挨拶をした。名乗りをしても当然のことながら巨匠に記憶があるはずはなかった。でも写真撮影とインタビューが

あったことは、うっすらと覚えていて、分厚い手を差し伸べて、にこやかに握手を交わしながら、しばし日本のことを懐かしんでくれた。その時、「もう一度、是非日本に来て下さい」と言う、「もう引退した身（84年に引退表明）だから、ちょっと無理だ」と笑っていた。

でも翌91年11月にはサントリーホールにチェコ・フィルと元氣な姿を見せ、超満員の会場を沸かせた。それがこのCDで、私にとって巨匠を撮ったラスト・ショットとなった。

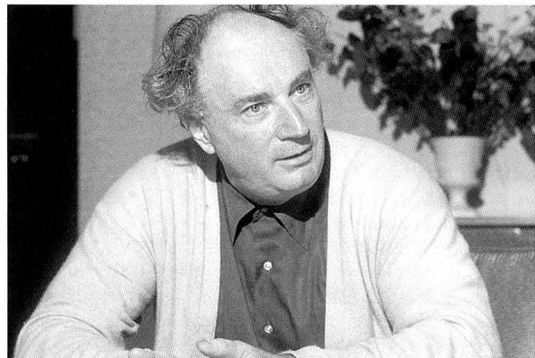
私が75年に巨匠と会ったのは、当時、首席指揮者を務めていた手兵のバイエルン放送交響楽団を率いて2度目の来日をした時のことであった。その折の6月6日、公演が終わって離日する日の朝、帝国ホテルでインタビューと撮影をするチャンスに恵まれた。その時の想い出の一部をご紹介します。それはチェコの音楽を理解する上でかなりの示唆に富んでいるので。

巨匠はその当時、61歳だった。大柄で堂々とした体躯の持主で、ブルーの透き通った瞳は親しみ易く優しい人柄を反映していた。話し方は雄弁で、熱っぽく知的な包容力に溢れていた。

話題は来日公演で演奏したスメタナの《わが祖国》とマーラーの《交響曲第9番》のことが中心だった。この2人の作曲家の作品の背後には、チェコ人が置かれた社会背景を知ることが重要だと強い言葉で語られていた。それは前記した、チェコの“ビロド革命”に収斂されるものであった。

スメタナの《わが祖国》は、外国人に祖国を奪われたチェコ人にとっての祖国の自然や歴史上

の事実が物語られている心理的な音楽であるけれど、交響詩という標題（プログラム）音楽が非常に音楽的なので、世界の人々に受け入れられているのだという。巨匠はこの6つの独立した交響詩を1つの交響組曲として演奏する時、ボヘミアという特定の土地や民族との結びつきを想定して、その表現の1つとして、3曲目の「シャルカ」と4曲目の「ボヘミアの牧場と森から」の間に休みをとるだけで、あとは連続して演奏してい



1975年の来日の際のクーベリック。撮影：木之下 晃

る。「ドイツでは各曲ごとに休みを置くのが原則で、慣例になっているけれど、私はアタックで続けている」と語っていた。というのは「ヴィシヘラート」の終わりに「モルダウ」のテーマが顔を出しているから。そして「タボール」は南ボヘミアの戦争を扱った力強い表現で、「ブランク」はこの強いテーマを別の側面から見つめ、別のトーンで書かれているので、それと対比させるために続けるのだとのこと。あといろいろと細部の展開について判り易く説明を下さったがそれは割愛する。

またオーケストラの楽器配置について、巨匠は第1ヴァイオリンを指揮者の左側に、第2ヴァイオリンを指揮者の右側に置くスタイルをとっている。これは両者を向き合わせることで対位声部であることが明確化され、第2ヴァイオリンとヴィオラの内声部が調和をとり、第1ヴァイオリンとバスの両外声部の高音域と低音域のバランスがとれるからだという。重要なことは、古典派から1930年代までの作品の演奏は、当時の作曲家が考えていた楽器配置がこのスタイルだったということで、その方法をとめることが望ましいと思う。

マーラーについては、彼がチェコのメーレン地方（チェコのカリシュトという小村）で生まれたユダヤ人だけれど、作曲家を民族的に捉えるよりも、当時の社会状況を深く考察する必要があるという。それはスメタナについても同じで、「言葉と表現」という問題である。マーラーが生まれた時代、即ち1860年に生まれてすぐの1867年に、オーストリア＝ハンガリー二重帝国に併合されて、ドイツ語を話すドイツ文化圏で暮らさざるを得なくなったわけで、そのことによって自分たちの言葉を失ってしまったのである。しかし彼はあくまでもボヘミアの人間だったことを忘れてはいけないと語る。例えばマンハイム楽派はバイエルンの選帝侯カール・テオドルのもとにあったことからドイツ音楽と考えられているが、実際はそれを構成していたヨハン・シュターミッツをはじめ活躍した音楽家はチェコ人でチェコの音楽であった。それにもかかわらずドイツという国民性にカムフラージュされて、その抑圧のもとにドイツのものとなっているのは罪悪以外の何物でもないと巨匠は語気を強くしていた。

マーラーを知る時、まずチェコ民族がドイツ民族にいかにか抑圧されたかという社会状況を知ることが大事で、チェコ民族はあくまでもチェコ民族で、彼は自分たちの言葉を喋れない不自由さに耐えて、人間が人間として、その自由のために闘っていたのだという。

マーラーの第9番の最終楽章は、死に臨んだ人間の証言で、祈りであり、最後の生命力なのである。それは彼が終生求めてきた人間性への表現である。そこに描かれているのは救世主メシアを思う強靱な精神で、それは交響曲第2番の《復活》にも通ずるもので、彼はこの第9番の終楽章で“永遠の生”に達したのである。

巨匠のこの言葉は、このCDに収められている91年の演奏から26年前のものであるけれど、彼のチェコ人としての抑圧から昇華した想いが込められていて、感慨無量なものがある。

無二の体験の彼方へ

許光俊

ラファエル・クーベリックがチェコ・フィルとともに演奏したサントリーホールでのコンサートは、私にもっとも強い印象を与えた音楽体験のひとつである。今でも、あの時ホールでどのような音が鳴っていたかを、まざまざと思い出すことができる。それは、カルロス・クライバーの「雷鳴と電光」を初めてミュンヘンで聴いたときの、いったい何が始まったのかと驚愕するような音、あるいはレナード・バーンスタインがマーラーの交響曲第9番でオーケストラから引き出した、身を切るような凄惨な音などとともに、私にとってもっとも忘れられない音だ。

クーベリックは心臓病を患い、自然消滅的に引退してしまった指揮者だった。1980年代になると、あれほど精力的だった1970年代に比べて活動は目に見えて減り、そのあげく、予定された引退コンサートもキャンセルした。以後、カリフォルニアで療養していると伝えられていた。1914年生まれだから、当時まだ70歳をやっと超えたくらいであり、実年齢よりも元気な老人が多い指揮界にあっては、まだまだと惜しまれる早さだった。

それだけに、冷戦終結後、クーベリックが

40年ぶりに、かつて共産化を嫌って出国したチェコに戻り、チェコ・フィルを指揮するというニュースは、非常な驚きをもって受け止められた。クーベリックはごく若いうちから才能を認められてこの楽団を指揮していたが、青年指揮者クーベリックを知る楽員はもはや皆無かそれに近かったはずだ。

けれども、プラハで行われたコンサートはわれわれが期待したほどすばらしいものではなかった。CD化されたライヴ録音（スプリフォン原盤、コロムビア）を聴いても、表現の豊かさ、広がり、細やかさ、緊張感、いずれも今ひとつのようには思われる。漏れ伝わってくる所によると、本番前の総練習がすさまじい演奏で、指揮者もオーケストラも疲労困憊してしまったとのことだった。

だが、そうした演奏内容とは関係なく、1991年のクーベリックとチェコ・フィルの来日公演は、たいへんな人気を博した。高額なチケットはまたたく間に売り切れ、当日、ホールの外には、当日券を求めて空しく待つ人が長蛇の列をなした。私は、プラハ・ライヴの様子からしてさして期待もなかったけれど、チケットを譲ってくれる人がいるというので、出かけた。どれどれお手並み拝見とばかり、醒めた気持ちで席に着いたが、そのとき、わずか数分後には比類ない音楽に打ちのめされることになるうとは、まるで予想もしていなかったのである。

超満員のいきれがするホールで演奏が始まるや、聴衆は完全に度肝を抜かれた。チェコ・フィルはたび重なる来日によって、すで

に日本の愛楽家のよく知るところだったが、その日、人々の前で演奏したのは、いつも親しんでいる穏やかで控えめでお行儀がよい楽団ではなかった。怒濤のような響きの奔流に人々はたじたととなり、激しい感情表現に心を奪われた。和音は重々しく、上昇する音型は緊張感に富み、金管楽器は完全な確信をもってファンファーレを吹き鳴らした。弦楽器はからみつくような気味の悪さをもし出す一方で、一丸となって轟然と疾走した。リズムがふんばるところは地に足が生えたようにがっちりふんばり、飛び跳ねるところでは踊り狂った。全編これ息詰まるようなエネルギーの噴出であり、しかも見境のないおめでたい熱狂ではなく、音楽の各場面は的確鮮明にたくましい筆致で描き出された。言うまでもないことだが、いくつかの世界的に評価が高いオーケストラが日常的に聴かせるようなただの力の誇示とは、はるか隔たっている。身体的な力があるから音楽がそうなるのではなく、吹き上げてくるような熱気が音楽の異常な強さが生まれているのだった。

私はステージの横の席で、激越な渦を巻いて襲いかかってくる管弦楽の響きを、ただただ呆然と聴いた。今思い返すと、演奏時間はおよそ70分ほどかかったはずなのに、またたく間に終わってしまったかのような気がする。

クーベリックは指揮台上では大きな身振りで指揮し続けていたものの、体力的には限界すれすれだったらしい。休憩中も舞台裏に退くや、椅子に倒れ込んでいたのだという。が、

それほど厳しい状況だったとは、少なくとも聴衆の目には見えなかった。今日、渾身などという言葉はずいぶん安っぽいものになってしまったが、これこそが渾身の演奏と呼ばれるべきものだったのである。

クーベリックの指揮するスメタナ《わが祖国》は、日本においては、フルトヴェングラー指揮のベートーヴェンの交響曲であるとか、トスカニーニ指揮のヴェルディであるとか、ムラヴィンスキー指揮のチャイコフスキーであるとかと同様に、ながらく一種の絶対的な基準として取り扱われてきた。確かに、クーベリックの《わが祖国》の録音としてもっとも知られているボストン交響楽団との演奏（1970年代初頭、グラモフォン）は、非常にすぐれたものである。この楽団は日本の聴衆にとっては、小澤征爾のオーケストラとして親しまれてきたが、クーベリックが指揮すると、小澤よりももっとも濃厚な色で鳴り響く。劇的な起伏も大きく、たとえるなら、ルーベンスの大きな絵画作品のような印象である。いや、もっと言うなら、ハリウッド映画のどぎついまでのメリハリを持つ演奏である。逆に繊細さという点では十分とはいえないものがあるが、最初から壮大でドラマティックな壁画が目指されているのだとしたら、そうした欠点を言い立てるのは詮無いことになる。クーベリックはバイエルン放送交響楽団やベルリン・フィルと数多くの録音を制作しているが、どうしてよりによって《わが祖国》がボストンとともに録音されたのか。理由は私は知らないけれど、結果的には十分

以上に立派で、おもしろくて、多くの人に支持される演奏として愛され続けることになった。

これに比べればよくは知られていないけれど、バイエルン放送交響楽団とのライブ録音(1984年録音。オルフェオ原盤、キング)もある。こちらではものの見事にボストンと対照的な音楽が聴ける。直接的な力感はボストンに及ばないが、特に叙情的な部分の何とも言えない柔らかな叙情性がすばらしい。落ち着いていて、気品がある。ボストンのほうが原色ばかりなのに比し、中間色がたくさんある。それらの演奏に比してこのチェコ・フィルのものは……。

いや、比べることはやめておこう。たとえば、自分が経験した恋愛を映画や小説の中で描かれる恋愛と細かく比べる人間がいるであろうか。特別な体験とはなべて比較を絶して屹立しているのではあるまいか。おそらくあの日会場にいた人ならば、あしたの経験を他と比べてみようという気は起きないだろう。比較するというのは、一種の情報処理の作業であるが、普遍的な情報に還元されない何か、つまり、経験した本人ですら何を経験したのか実は正確に把握できないような経験こそが、まさに特別な経験なのである。クーベリックとチェコ・フィルの演奏会は、そのようなのだった。

この録音からも、その片鱗以上のものが伝わってくる。たとえば、「モルダウ」の激流のところ。すさまじい音のぶつかりあいだ。そのあたりを境にして、演奏はさらに高揚し

ていく。「シャールカ」3分あたりからの弦楽器の表現力の生々しいこと。特に4分あたりからヴァイオリンの歌がどんどん高まっていくあたりは圧巻だ。やがて6分過ぎからは、一転ものすごい重量感でリズムを刻んでいく。7分半を過ぎてからのぞくとするような暗く不気味な弱音も聴きものだ。そこから音楽は突然速度を速める。録音で聴いても息詰まるほどだ。このあと、休憩をはさんで「ボヘミアの森と草原から」になる。最初の曰く言い難い、呑みこまれそうな大きさ。一転して広がる平和な風景。讃歌の熟っぽさ。壮大なボルカ。そして、ことに最後の2つの楽曲における自信満々の確信と陶酔。曲尾近くに訪れる崇高なクライマックス。

実は《わが祖国》は、冷静に見るなら、やたらと戦争ばかりを題材にした、あまりにも露骨で煽情的な民族ないし国威高揚音楽と呼ぶしかない代物である。標題を読んでみるといい。歴史、国土、神、宗教……愛国主義者の好きな語彙はあきれるほどにいつも同じだ。現在の日本にも、国民国家の幻想をいまだ逃れられない、それどころかそれを強化しようとする人たちが大勢いる。しかしながら、歴史をひもとくなら、ことさら国民や民族や国家が結びつけられて強く言われるようになったのは、ようやく19世紀中頃のことではない。すなわち、資本が国家と手を結んで国力が増大し、植民地が徹底的に搾取されるのとひきかえに、宗主国の人々の生活が豊かになった時代なのである。言い換えるなら、資本が最大限の利潤を追求するためには国民国

家という装置が重宝だったのである。

こうした状況は常に存在したことではないし、どこにでもあったわけでもない。たかが150年ほどの間、ヨーロッパとそれに影響された地域で了解された概念にすぎない。そして、《わが祖国》はこうした史的背景のもとに生まれ得た音楽である。成立した歴史的必然性は理解するとしても、こんな代物を生み出した精神はとっくに乗り越えられてしかるべきなのだ。容赦なく言ってしまうなら、《わが祖国》は、人類が経た野蛮の一例にすぎないのである。

そんなことを私はホールで、そして家に帰ってからも考えた。だが、音楽から与えられた感銘はあまりにも大きかった。私は今もって、音楽的感銘と、理性で考えたことをうまく調和させることができない。本心から言えば、私はこの音楽を嘲笑したい。圧倒的であればあるほど、馬鹿馬鹿しいと否定したい。しかし、そんなことはできそうにない。録音を何度も聴けば聴くほど、会場で起きてしまった音楽への感嘆は増すばかりである。完璧な確信に裏付けられた「ブラニーク」冒頭に端的に表れているように、この《わが祖国》はまったく許し難い、それでいて荘厳なオルガスムである。

芸術は罪深い。理性を抗い、麻痺させようとたくらむ。そういう危険な芸術の最高の例のひとつが、この《わが祖国》なのである。

楽曲について

●スメタナ：連作交響詩《わが祖国》

19世紀チェコ国民音楽の始祖スメタナ(1824-1884)が作曲活動を始めたのは1840年代のことだが、当時チェコは文化的にも政治的にもドイツ・オーストリアの影響を強く受けており、スメタナがはじめピアニストとして音楽活動を始めたのも、シューマンとショパンの強い影響からだ。とくにシューマンからの影響は顕著だったが、シューマンはスメタナの創作するピアノ曲にあまり関心を抱かなかったという。そうした折に、スメタナの作品を擁護したのがハンガリー出身で全ヨーロッパ的なヴィルトゥオーソとして名声を博していたリストだった。スメタナはリストとの出会いによって、当時高まりを見せつつあった民族主義にめざめ、その高まりに身を投じていくことになる。しかし、自国の音楽文化を創造するという使命をもったスメタナであったが、彼はまず母国語であるチェコ語を習得するところから始めなければならなかったほど、当時のチェコでは「ドイツ化」が進んでいたのだった。母国語を習得する過程でスメタナは、自国の歴史に強い関心を抱くようになり、さらにリストとの交流のなかで、1856年に「交響詩」という文学・歴史的な内容を盛り込みやすいジャンルを知ることになり、その2年後の1858年にスメタナの初めての交響詩となる《リチャード3世》が作曲された。

その後、スメタナは1863年にチェコの国民歌劇の誕生を告げるオペラ《売られた花嫁》、1872年にはチェコ建国の女神リブシェの伝承にもとづくオペラ《リブシェ》を作曲し、強力にチェコ国民音楽を推進していった。連作交響詩《わが祖国》の

構想は《リブシェ》の作曲過程で、リブシェが嫁いだといわれるブシェミスル家の居城であったヴィシェフラドの伝説を音楽化しようとしたことから始まる。そして第1作の《ヴィシェフラド(高い城)》が完成されたのは1874年で、その後1879年に最後の第6曲《ブラニーク》が完成する。

*

交響詩《ヴィシェフラド》(1874)

「高い城」という邦題でも知られる第1曲《ヴィシェフラド》は、詩人がヴィシェフラドの廃墟を前にして過去の栄光と没落の物語を詠うというもので、ハープによるヴィシェフラドの栄光を語る詩人の印象的な琴奏の響きではじまる。この主題は、冒頭の解説で述べたように、スメタナのイニシャルに基づいており、詩人＝スメタナがチェコの建国の輝かしい伝説に思いをはせ、チェコの民族意識の高揚を歌い上げる内容となっている。

交響詩《ヴルタヴァ(モルダウ)》(1874)

チェコ民族の象徴といえるヴルタヴァ(モルダウ)の流れを音楽化したものだが、そこには過去から現在に向かって大きくうねるブラハの歴史が重ねられている。音楽は、ヴルタヴァの2つの源流の小さな流れがしだいに大きな流れとなり、「森の狩り」や「村の婚礼」「月の光と川の妖精の踊り」といった情景を描きながら、「聖ヨハネの急流」を経て、ブラハ市内の「力強い流れ」のクライマックスが導かれる。そして最後の《ヴィシェフラド》の主題が、ヴルタヴァの流れがチェコの歴史の象徴でもあることを、強烈に印象付けている。

交響詩《シャルカ》(1875)

標題となっているシャルカは、ギリシャ＝ローマ神話のアマゾネス伝説のチェコ版のプラスタ伝説に登場する女兵士で、過去に男に裏切られたシャルカが、みずからが囹となって自軍を導き、

ボヘミアの騎士たちに復讐をするというもの。幻想曲風の作品で、独立して演奏されることは少ないが、交響詩全体をつなぐ転換を示す作品である。交響詩《ボヘミアの森と草原から》(1875)

この作品は伝説に基づく標題をもたない点で、《わが祖国》のなかでも異質の作品である。スメタナによれば、この作品について「ボヘミアの自然を見たときの感興である。牧場や森のいたるところから楽しげな歌や悲しげな歌が聞こえてくる。(……) だれもがそれぞれの幻想を描くことができる」と書いている。

交響詩《ターボル》(1878)

これまでの4曲と大きく異なるのは、この作品と、これに続く《ブラニーク》が、チェコの近代史における歴史的な事柄を描いていることである。ターボルとはブラハの南にある町の名前で、フス戦争(1419～1436)の際にここを根城にしたフス教徒(ターボル派)と、ドイツ出身のボヘミア国王軍・教皇軍の連合軍との戦いを描いている。みずからの力でチェコ民族の宗教的アイデンティティと民族主義を勝ち取った過去の歴史への強烈な思いにあふれた作品である。

交響詩《ブラニーク》(1879)

前作《ターボル》と対をなす作品で、前作でも用いられたフス教徒の賛美歌《汝らは神の戦士たれ》や、《汝らの側の神とともに、終末において勝利を取めん》などが効果的に用いられている。ブラニークは、フス教徒の戦士たちが戦いに備えて集っていた山の名前で、2つの賛美歌に導かれて、戦いに勝利する過程が描かれる。最後のフィナーレでは、第1曲《ヴィシェフラド》のテーマが高らかに響きわたり、過去の建国の歴史と現在とが強い絆で結び付けられることになる。(脇田真佐夫)

- ALT001 Evgeni Mravinsky / Leningrad Philharmonic Orchestra "Shostakovich : Symphony No.5" 26.5.1973 (Tokyo Bunkakaikan)
- ALT002 Evgeni Mravinsky / Leningrad Philharmonic Orchestra "Beethoven : Symphony No.4" "Lyadov : Baba Yaga" "Glazunov : Raymonda" 26.5.1973 (Tokyo Bunkakaikan)
- ALT003 Andre Cluytens / Orchestre de la societe des concerts du conservatoire "Berlioz : Symphony fantastique" "Moussorgsky : Il Vecchio Castello" "Bizet : Farandole" 10.5.1964 (Tokyo Bunkakaikan)
- ALT004/5 (2CD) Andre Cluytens / Orchestre de la societe des concerts du conservatoire [ALL Ravel] "Rapsodie espagnole" "Ma Mer l'oye" Suite, "La Valse" "Le Tombeau de Couperin" "Pavane pour une infante defunte" "Berlioz : Hungarian March" 7.5.1964 (Tokyo Bunkakaikan)
- ALT006/7 (2CD) Jun Märkl / NHK Symphony Orchestra "Debussy : Prelude a l'apres-midi d'un faune" "R.Strauss : Tod und Verklärung" "Debussy : La Mer" "Mozart : »Don Giovanni« overture" "Brahms/ Schönberg : Klavierquartett Nr.1" 23.6.1997 Live (Suntory Hall) / 29.4.1998 (NHK Hall)
- ALT008 ~ ALT010 Rafael Kubelik / Barvarian Radio Symphony Orchestra [ALT008] "Wagner : »Die Meistersinger von Nurnberg« Overture" "Bartok : Concerto for Orchestra" "Dvorak : Slawische Tanze op72-2,7" 13.4.1965 (Osaka Festival Hall)
- [ALT009] "Mozart : Symphonie Nr.35" "Hindemith : Sinfonische Metamorphosen uber Themen von C. M. von Weber" "Frank : Symphony" "Wagner: Lohengrin Introduction(3.Szene)" 23.4.1965 (Tokyo/Tokyo Bunka Kaikan)
- [ALT010] "Wagner: »Tristan und Isolde«-Prelude and Liebestod" "Schubert: Symphonie Nr.8 (7)" "Dvorak: Symphonie Nr.9" 24.4.1965 (Tokyo/Tokyo Bunka Kaikan)
- ALT011 ~ ALT013/4 (Altus green series) Hisayosi Inoue / Armenian Philharmonic Orchestra [ALT011] "Kimi ga yo (Arr.by Atsuhiko Takenaka)" "Atsuhiko Takenaka : Two movements for orchestra" "Aram Khachaturian : Symphony No.2" "Kiyoshige Koyama : Aino no uta (The song of Aino)" [ALT012] "Claude Debussy : Prelude a l'apres-midi d'un faune" "Maurice Ravel : Sheherzade-Toris poems de Tristan Klingsor" "Akio Yashiro : Symphonie" Chieko Hayashi (ms) [ALT013/4] (2CD) "Loris Tjeknavorian : Valse d'amour from the Ararat suite" "Loris Tjeknavorian : Piano Concerto ,Op.4" "Akira Ifukube : Violin Concerto No.2" "Yuzo Toyama : Rhapsody for orchestra" "Akira Ifukube : Rapsodia Concertante per Violino ed Orchestra" Masanori Kobiki (pf), Megumi Ogata (vn), Takumi Kubota (vn) Recording : Aram Khachaturian Hall, Yerevan, Armenia September 2000, 03 October 1993
- ALT015/16 (2CD) Eugen Jochum / Royal Concertgebouw Orchestra Amsterdam "Bruckner : Symphony No.7" "Mozart : Symphony No.33" 17.9.1986 (Tokyo/Showa Hitomi Memorial Hall)
- ALT017 Jun Märkl / NHK Symphony Orchestra "Bartok : Romanian Folk Dances" "Dvorak : Symphony No.9" 17.1.2001 Live (Suntory Hall) / 27.1.2001 Live (NHK Hall)
- ALT018 ~ ALT020 Kirill Kondrashin / Moscow Philharmonic Orchestra [ALT018] "Mahler : Symphony No.9" [ALT019] "Glinka : »Ivan Sussanin« Overture" "Tchaikovsky : Symphony No.6" [ALT020] "Encore collection" (Akutagawa : Triptyque for String Orchestra, Stravinsky : Petrouchka - Russian Dance, Mahler : Symphonie Nr.3- 2 satz, Prokofiev : The love for three oranges-Scherzo /March, Wagner: Lohengrin- Vorspiel 3 Aufzug, Debussy : Nocturnes - Fetes. Anime et tres, Debussy : Prelude a l'apres-midi d'un faune, Ravel: La valse 1967 (Tokyo)
- ALT021 (Altus Green series) [Nordic Music for the Violin] "Nielsen : Preludio e Presto" "Nielsen : Sonata for the Violin and